花ある人々

移住女子座談会

「風の人」「土の人」という言葉があります。これは農学者・玉井袈裟男の「風土舎」設立宣言にあり、「人にも風の性と土の性がある。風は遠くから理想を含んでやってくるもの、土はそこにあって生命を生み出し育むもの」と謳われています。

南部町には、この地に生き抜いた先人がその誇りを伝え、そして今、多くの夢を持った風の人がやってきて、交流を深めながら、土の人が確かな足取りで動き始めています。

「女性が元気なまちは活性化する」と言われ、また、地域ブランドに必要な〝共創〟は女性の方が得意とも言われています。

移住定住者は女性ばかりではありませんが、ここでは南部町にUターン、Iターンして活躍している女性に集まっていただき、南部町の魅力や今後の希望などを伺いました。

移住のきっかけとその後

司会――町では人口減少問題を背景に、移住・定住促進に力を入れています（※1）。高木さんは移住して7年目ですが、その動機と、どのようにして移住したのかをお聞かせください。

高木――農業がしたいというのが最初にあって、青森県内の主に県南地域を探していました。前に住んでいた八戸はヤマセがきつく、日照時間が短かったので南部町に移住することを決めて、そこから役場の人に連絡をして「住みたい」という話をしたり、友達の実家が南部町にあったので、そこのお父さんにお願いして家を探してもらったり、とにかく知っている人脈を全部使いました。

自宅から車で5分ほど離れた梅林で草刈りをする高木さん夫婦。愛犬のクリとクマが何時も同行する

司会――田中さんは南部町出身のご主人のUターンに伴ってこちらに来て、移住3年目ですか。

田中――6年前に結婚する時に、いずれは南部町に戻ると言われていたので、その時から東北に住むことはイメージしていました。当時住んでいた鳥取県で移住アドバイザーをしていたので、ここで吸収できることはいっぱい吸収し、楽しんで、ゆくゆくはそれを青森に持っていくのだろうなあという気

高木有紀野／埼玉県和光市出身。大学卒業後、会社勤務を経て平成26年（2014）南部町に移住。平成28年（2016）から京都府出身の夫（克吉）と共に就農し「まめきち自然農縁」を運営。夫と長男（18歳）、次男（14歳）、三男（10歳）、四男（7歳）の6人家族。下名久井在住。

【座談会出席者】（五十音順）

高木有紀野（埼玉県和光市出身／平成26年Iターン／「まめきち自然農縁」を運営／青森なんぶ達者村ホームステイ連絡協議会メンバー）

田中　綾乃（兵庫県神戸市出身／令和元年Iターン／南部町移住者受入協議会メンバー）

田村　ゆに（北海道札幌市出身／平成28年Iターン／「自給自足実践フィールドうちみる」を運営）

武良亜友美（神奈川県横浜市出身／令和2年Iターン／地域おこし協力隊員）

［司会］

村田　久（北の杜舎）

※令和3年5月26日収録

クルミの皮で作った籠。
ホームステイでの
体験メニューにもなっている

持ちでした。

司会――田村さんは結婚を機に移住され5年目になりますが、最初から農業には関心はありましたか。

田村――ここに引っ越すまで、農業はやったことがありませんでした。でも食に対する関心は移住する数年前からありました。以前は東京に住んでいたのですが、都心部でオーガニックなものや健康にいいものを食べようとすると、どうしてもコストがかかるんです。南部町なら畑ができるので、それなら自分で作ってみたいと思い、今やっているところです。

司会――武良さんは地域おこし協力隊として移住2年目ですが、南部町が日本語講師を求めていたことにマッチングしていらしたのですか。

武良――そうです。青森に来たのは、地域おこし協力隊の面接の時が初めてでした。母の出身地が岩手なので、こちらに来るのにそれほど抵抗感はなかったです。

田中――同じ下名久井にお住まいの高木さんにお聞きしたいのですが、私の家は住宅街から少し離れていることもあって、ご近所付き合いというとお隣さんぐらいなんです。ご近所の方たちとの距離感はどんな感じですか。

自宅そばの園地で、四男と一緒の高木さん夫婦

クルミの皮ハギ作業をする高木さん

高木――子どもが小学校に行き始めると、急に広がりますよ。近所に同年代の子がいると、そこの家のおじいちゃんやおばあちゃんと交流したり、子どもが窓口になって広がりましたね。

田村――皆さんは、移住してから感じたギャップはありますか。私が初めて青森に行ったのは中学校の修学旅行の時で、青森イコール奥入瀬渓流という感じで自然豊かなところだと思いました。人生2回目の青森が南部町で、自然豊かなイメージは変わらなかったのですが、実際に住んでみると八戸が近くて、車ですぐに行けるスーパーがあって、生活するのに便利な場所だと感じました。

高木――慣習が全く違いますよね。ものの考え方が、都市部と農村では根底的なところが違うので、初めの3年間はかなりアップダウンの繰り返しという感じでした。私たち夫婦は都市部の出身で、農村というものを全く知らなかったんです。5年目ぐらいから落ち着いてきましたね。

田中――八戸が近いというのは大きいと思います。南部町の近くに大きな町がなかったら、1年持たなかったかもしれません。普段住むには南部町の環境はほどよく、だから住んでいられるんだと思います。